

あとは野となり山となる

1月3日付の日本農業新聞に、あらためて、3・11直前にまとめられた国の今後50年の展望の報告書(「国土の長期展望」中間まとめ)の一部が載っていました。

「人口は、3,300万人減、高齢化率4割、現在の居住地域の2割は失われる」とのこと、失われる居住地域の多くは、農林業を営む里地や里山であり、過疎地集落調査(2011年 総務省)によれば、いずれ「2,300集落が消滅する」と予測しています。これを読んで私は、取り戻す、と力むより、「ああ、あそこも帰っていった」と、野山の繁盛をながめていようと思いました。

身近なところで、あちらこちら、メガソーラー用地として、かつてない規模の里山や雑木林の伐採が行われています。奪いながら失いたくなくて、相変わらず欲張り過ぎでしたね。

国家を家になぞらえるなら、家族構成員が減ったら、その分、家は小さくていいわけです。大事だからと、これまで通り維持しようと思えば、骨が折れます。私としては、台所ばかり狭くしていくやり方は、どうかと思います。でも、出来合いのものを買ってくればいいじゃない。そんなことより祭り(オリンピック)だ! バクチ(経済特区でカジノ)だ! ……

ならば、ふつうにおいしいものを作っていくことです。

拍子抜けされたでしょうか? 特別な抱負ではありません。つきものの落ちた風な、年の始めです。

居場所をつくる

年末年始、1週間出荷がなかったのは、開業以来かとも思います。まだ、仕事の体勢に心身ともに復帰できていない感じです。そんななかで、とてもイメージをふくらませてくれた本を読みました。帰省した娘が持ち帰った『ひとの居場所をつくる』(2013年9月刊 筑摩書房)です。著者は「働き方デザイナー」の西村佳哲さんという人。岩手県遠野に、馬と人と農業が共にある空間を作ろうと動いている、ランドスケープ・デザイナーの田瀬理男さんへのインタビュー本です。夫の言う「繁盛する野山」に、ちょっと間借りさせてもらう住み方を、都会に集中している人たちが移ってきて始めたら、とても楽しい村ができるのではと、夢を見させてくれました。



暮れから野菜高値のニュースが続いていました。当菜園の野菜も、この冬はとても豊かとはいえない状況ですが、あれこれやりくりしつつ、のりこえていきたいです。今年もどうぞよろしく。(1月6日 泰子 ~絵は、晃のです)

